

# これから庭を造る人々へ

岸 村 茂 雄

ていなかつたなら、しみじみと心にしみて  
くる庭とはなりません。  
これが、作庭の基礎です。

作庭の技術の土台となるものです。

## 一 作庭の基礎

庭は、詩です。絵です。いいえ、そんな飛躍したい方でなく、こういいましょうか。あなたがた家族全員の詩集ですよ、画帳ですね。

幼い日のあなたに、木や草や花の名を一番はじめに教えてくれたのは、庭でしたね。太陽の暖かさも、風の涼さも、月の光のつめたさ、そして、小さな昆虫の生活まで知らせてくまましたね。子供のころ、庭の片隅でたべたイチゴや、ツツジの花をつんで何とはなしに舌を触れたその蜜のあまさ、庭の木立をはげしく打つた夕立の音の記憶も、まだ体のどこかに宿している人がいるはずです。ほとんどの人が、庭によつて自然への開眼をしたのではないでしようか。

自然是、人類のふるさとであると思います。ふるさとへ帰ると、人の心はひとりでにひらいてくるように、自然の中に帰つて行つた時、頑なであつた心はひとりでに澄んで来ます。人間の本当の想いは、自然の愛撫の中にのみあると信じています。人が石を愛する気持の根底には、石器時に人類の石に抱いていた郷愁が、今も血の中にある

るからでないかと、思うのです。私も外地で終戦にあいましたが、その時の空虚な心には、父母もきょうだいも誰もなかつた。

ただ、幼い日に庭で遊んでいたら桜の花びらが雪のやうに無数にふりかかってきた、そんな古い記憶が、ふと、そしてありありと私の心を撫でてきて、それに索かれて還つてきました。庭は、そんな力を持つていたのです。

——ふるさとの庭の姿は、そこはかとなしい郷愁となつて壮年期にありまたそれを過ぎた人の心を、今もさびしくあまくゆすぶりはしないでしようが。もしさうなら、私たちは子供のために、愛情をこめて木や石や花や草を敷地の中に置きたいのです。それにより子供と自然とをひとりでに結びつけて、自然の一部が自分であり、自分の一部が自然であることをやがて悟らせ、更に私たちからの人生をも、より豊かにしたいのです。

自然を貴ぶ気持、鋭く自然を観賞する心が、魂の底深くなかつたなら、良い庭は造れません。庭を「住む為の器」とみて、戸外室のやうに取扱う近代庭園の設計図の蔭には、ことさらこの気持がたくましく動いています。

## 二 庭園と設計

良い庭は、よい設計から生まれます。このわかりきつたことが、東京、大阪などの大都市以外にはあまり通用していないようです。依頼主に、庭の設計を、というと、「そんな大げさなことでなしに造つて下さい。」

——ふるさとの庭の姿は、そこはかとなしい郷愁となつて壮年期にありまたそれを過ぎた人の心を、今もさびしくあまくゆすぶりはしないでしようが。もしさうなら、私たちは子供のために、愛情をこめて木や石や花や草を敷地の中に置きたいのです。それにより子供と自然とをひとりでに結びつけて、自然の一部が自分であり、自分の一部が自然であることをやがて悟らせ、更に私たちからの人生をも、より豊かにしたいのです。

木を集めてくれ、そして良い庭を造つてくれ。設計などはいらない。」

「とにかく、私はお金を出すのだ。良い植木を集めてくれ、そして良い庭を造つてくれ。設計などはいらない。」

「とにかく、私はお金を出すのだ。良い植木を集めてくれ、そして良い庭を造つてくれ。設計などはいらない。」

「ここがさびしいからツツジは如何ですか。」「こんな面白い木がありますから、植えて置きましょう。」

「ここがさびしいからツツジは如何ですか。」「こんな面白い木がありますから、植えて置きましょう。」

と、だんだん売込みが始まります。材料はいくらでも入つてゆきます。経費もだんだんとかかつて、何時になつても満足のゆく庭にはなりさうにありません。結局、植溜め（植木屋の材料置場）のような庭になつて、そのころには依頼主の方も庭に対する考え方を変えて、あきらめてくるようです。

ですし、その方がずつと経済的にできあがります。設計図なしで仕事にかかる場合、材料を壳込む者にとってはやりやすいのです。大抵の場合でしたらこうなるでしょう。

こうなつたら、庭は詩でも、絵でもなくなります。はじめにきちんとした設計図を要求しなかつた依頼主の側にも、責任の半分はあるようです。仕事にかかる前に、詳細な設計図見積書仕様書の提出を求めました。そして、このようにでき上つていくらという予算をつかんでかかつたら、こんな失敗ではなく、住み良い美しい庭園が構成されて行つたに違いありません。

### 三、庭園の平面的構成

「庭にもいろいろの流儀があるのでしよう」とすると、流儀によつて庭が構成されると思ひ込んでいるらしい素人の方から、こんなことを聞かれます。一寸、返答に困るのですが、「ない」と答えています。造る者にそれがあるとすれば、それは、日本庭園の伝統をよく勉強して、その中から自己の個性を強く打出してゆくことです。個性が一番大切で、その個性は伝統を栄養としたものでなければなりません。それが流儀です。

個性のない、流儀を固執する庭師は何処へ行つても、「真木があつてそれを中心にして作る」などといいますが、禪の流行をうけて、一つのものを見つめつくしたやうに構成する室町時代の庭なら知らず、現代のすべての庭にそれをあてはめるのは、時代錯誤もはなはだしい。少し極端ないい方ですが、尾形光琳筆の「梅林の図」に感ずる如く、自然の風景の中に額縁を持込んで、自然の一部分をそのまま絵にしたような、

自由な庭でもまた良いのです。

要するに、一般的の庭師が称して「流儀」というものを、そのまま検討もしないで信

用してはいけません。庭師が、自由な自己の構想を発見して流儀というものを否定し、更に勉強して、否定をもう一度否定する時、流儀というものはさんざんと光を放ちますが、流儀という狭い鋳型を大切にしてすべての庭をそれに押込め、美から自由な生命を奪つてゐる例を多く見る時、私は、「流儀なんてありません」と、答えてしま

うのです。「美」の創造から「型」が生れていますが、「型」から躍動した美は生れにくい。美は「型式化」された時から、その固定化が始まります。

では、庭は流儀ではなくて何により構成されるのでしょうか。勿論、材料ですが、材料を素材と加工材料とに分けてみましょ。前者は、樹木・草花・岩石などで、後者は、石燈籠・手水鉢・橋・ベンチ・日時計・バードバスなど、材料そのものが完全な形を持つてゐるものをおいいます。

材料のいくつかを組合せて、「局部」を造ります。鉢前・築山・燈籠附近の一つのまとまり、寄植された樹木の一群、アーチやバーゴラを取り囲んだ一つの雰囲気・花壇ロックガーデンなどが局部になります。

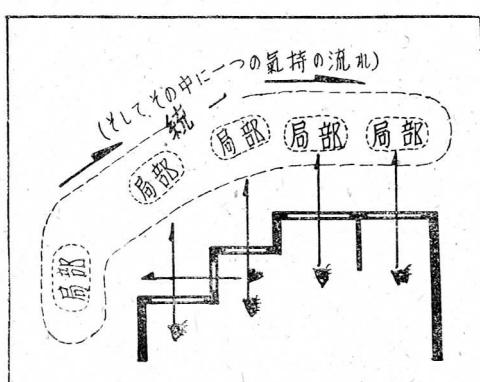
局部のいくつかを組み合せて、「部分」ができ上ります。個人庭園では、前庭・主庭・勝手廻りの庭、遊び場、茶庭などと呼んでいるがこれです。

その各部分を、都合良く割当てて「庭」が構成されます。この部分と、部分の中で

の局部の割当を「地割り」と私たちは呼んでいます。

何處までを主庭とし、前庭はどの範囲にするか、勝手廻りの空地としては、幾坪どちらねば四季を通じて不便であるか——この地割りの良否が、住み良い庭となるか否かを決定します。それは、平面図の上で検討してみるとことが便利で、家族全員の意見を元にして地割りを決めます。この地割りの

形をくずさないのが真、一番くずれたのが草で、書道、生花ではよく使っていますね。庭園の上で真行草などといいますと、若い造園家には分つてもられないかも知れぬ流れのリズムとでもいましようか。



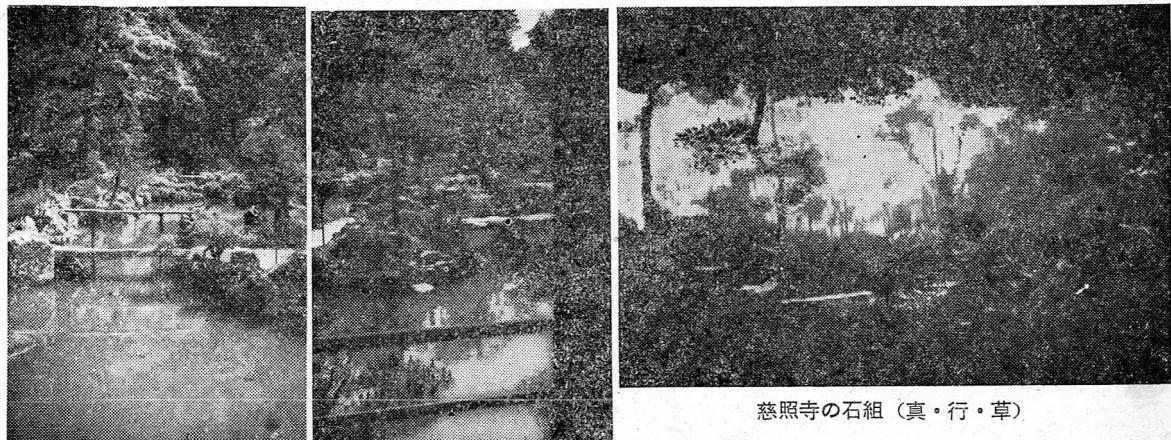
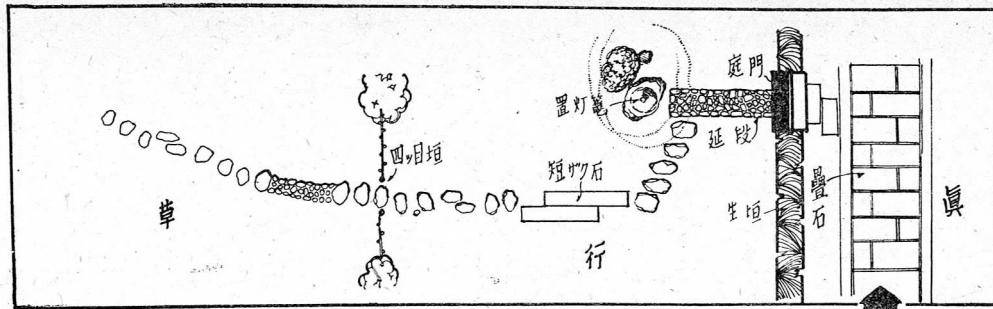
日本庭園にはいろいろの約束事があります。手水鉢には清淨石・蟻石・水揚石・水流石・蹲踞には前石・湯桶石・手触石・燈籠には灯上石・灯障の木等ほとんどものものがありますが、それらの役石・役木を省略せずに備えたのが真、その寸法・高さも決つているのが多いのですが、それらもくずしたのが行、更にくずしてさらりとした味を出すのが草です。型のきまつていらないものは自分の気持で、真行草の区別をつけてゆけばよいのです。近代庭園の場合でも、門から入つて主庭を通り裏庭へ通ずるその局部の連絡の中には、真行草に似た流れがほしい。玄関前が真、主庭に向うにつれて行、裏庭の方が草という風に、庭の中に一つのリズムをつけるのです。建築をよく見ると、

前章に述べたように前庭や主庭の中に、いくつかの局部が組合せられておりますが、局部と局部の間には、相関聯したもののが含まれていて、統一がとれていないなりません。更に、統一の底に一つの「変化のさざなみ」のようなものが流れていなかつたなら、余韻は生まれにくい。この変化を古くから「真行草」と称しており、庭園を設計する上に大切なことです。

形をくずさないのが真、一番くずれたのが草で、書道、生花ではよく使っていますね。庭園の上で真行草などといいますと、若い造園家には分つてもられないかも知れぬ流れのリズムとでもいましようか。

日本庭園にはいろいろの約束事があります。手水鉢には清淨石・蟻石・水揚石・水流石・蹲踞には前石・湯桶石・手触石・燈籠には灯上石・灯障の木等ほとんどものものがありますが、それらの役石・役木を省略せずに備えたのが真、その寸法・高さも決つているのが多いのですが、それらもくずしたのが行、更にくずしてさらりとした味を出すのが草です。型のきまつていらないものは自分の気持で、真行草の区別をつけてゆけばよいのです。近代庭園の場合でも、門から入つて主庭を通り裏庭へ通ずるその局部の連絡の中には、真行草に似た流れがほしい。玄関前が真、主庭に向うにつれて行、裏庭の方が草という風に、庭の中に一つのリズムをつけるのです。建築をよく見ると、

真行草のある場合がありますから、これと調和も計らねばなりません。



慈照寺の石組（真・行・草）

真行草を、日本庭園の足元にみる技巧で説明しましよう。先ず、玄関前は来客をつしんで迎える意味で真、ここは御影の切石などを使つて整然とたみます。中門を潜つて主庭に入る時これが行の姿に変り、「延段」と飛石に変つてゆきます。延段も足を踏入れた個所には整然としたものを置き、歩くにしたがつて形をくづして行きます。更に、内垣を通つて老人室か茶室の前行きますと、延段も飛石もぐつと形がくずれてきて、やがて気持だけの飛石になつて消えます。桂離宮に行きますと、この技巧の妙がよくわかります。この流れが逆になりますとおかしなもので、個人住宅で門から玄関までの間に飛石を打ちますと、はじめから氣持がくだけて、待合などに入つてゆく氣持になつてしまします。でもこんなことをやつている庭師も多いのです。

垣根の使いわけ、石組、木の植え方、ほとんどに真行草の流れがあるわけで、私たちが京都の名園を訪ねて感動する底には、そういう計算がちやんとなされ、それが成功しているからです。銀閣の名前で知られた銀閣にかけて池の石組に、真から行、草へのはつきりした流れを示しています。ここに懸つっている石橋にもその変化が見られ真の石橋には橋狹石が完全に残つています。ここにかけたのは少年のころ写した下手な写真で、それに例としてあげるには適當な個所からではないので恐縮ですが、いくらかでも真行草の流れが分つて頂けるでしよう。

庭にもそれを見る位置というのがあって、それを認ると立派な庭でも美しい眺めが得られない。庭園を観賞する者にとつても、作庭する者にとつてもそれを知ることは大切です。今更、こんなわかりきったことを書くのもおかしな話ですが、見る位置を誤つたために名園にとんでもない批評をしたり、落胆する人もあり、これは札幌に来て見た例ですが、まるつきり横を向いている庭もありました。後者の例は極端ですが、狭い庭だったので、庭師がひろびろとして自分の体が一番動かしやすい位置を正面として作つてしまつたのでしよう。肝腎の住宅から見ると庭が完全にそっぽを向いていました。また造らせた方のんきなもので気がつかずに暮してはいるようです。一般に都会での住宅の主庭は、建物からの観賞が本位で、部屋から絵が舞台装置を眺めるように造られます。部屋といつても、いろいろの座敷がありますからどの座敷から見てもまとまつていなければなりません。そのためには各局部が統一され、一つの全体となつてゐる必要がありますから、このため、設計図の完備していない時代では、なかなかこれも面倒なことだつたで

また、一般住宅では、庭を歩き、とき

## 五 庭を見る位置

は庭の中にテレスを設け、戸外室のような施設も致しますから、園路やテレスからも、ここから逆に建物の方を見返しても、庭と建物とがとけあつていなければなりません。更にもう一度、座敷に主觀をもどして園路やテレスを見た時、園路やテレスが樹木岩石流れのように、その庭園にとつて観賞上なくてはならぬものとして庭にとけ込んでいなければなりません。

庭を造る場合には、何時も「見る位置」を頭に置いていなければなりません。これ

は、垣根、張石などの細かい仕事に至るまでその通りで、「見る位置」に体を置いて仕事をするのが常識です。

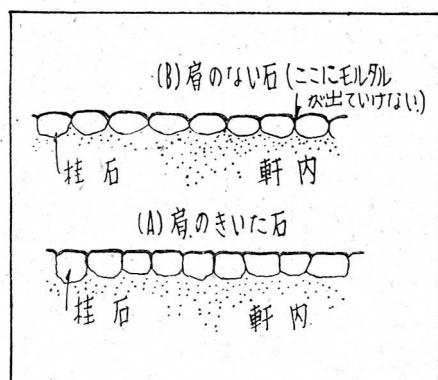
私たちが、古い庭を歩いていて、ある地點に参りますと、その附近に配されている石などが皆自分で見つめているように感ぜられて、ふと立止ることがあります。そんな場合には、昔そこに建物があつたか、何かしら人の足を止めるような施設があつて、そこを中心にして絵のような眺めがまとめられてあつたのに違ひありません。このことに注意して京都の古い庭を見ると面白く、金閣寺の庭も、金閣の焼跡に立つて見るべきなのです。

## 六 家と庭との連絡

建物と庭とを自然に連絡させる方法は、日本人は非常に巧みで、日本建築の場合では実にうまく調和されています。椽から沓脱石、それから飛石に伝つて庭へ。戸袋の側からは袖垣が出て、その前には手水鉢が置かれて庭に連絡しています。

土庇を使うといろいろの技巧を使うことができ、下は濡椽の線、上は庇の線が空を真一文字に劃し、両脇に捨鉢の線があり、それらが額椽となり庭は絵となつて部屋の中に入られられます。その他、猫間障子を用いたり、建物自体に庭を取り入れる手段が豊富にあります。

軒先の最辺の問題は沓脱石です。沓脱石は一本だけを用いる場合がありますが、近頃は椽が高くなつて来ておりますので、二本または三本を据えるのが普通になつています。沓脱石はどんな石でもよいのです。



第四図

が、あまり手を加えない石、生石を用いた方が上品です。

次に、軒下の舗装があります。上原博士の著書に、雨樋から糸を垂してそれを舗装の線とするとありました。が、そんなことは絶対なく、それより内側に入らねばなりません。外側の線は桂石をするのが普通ですが、桂石なしの叩きだけにすることも多く、叩きの場合は、砂利を散らした洗出しなどになります。瓦を並べて砂利敷とするな

どにします。瓦を並べて砂利敷とするな

が、あまり手を加えない石、生石を用いた方が上品です。

地形にテレスを用いますと、面白い庭になつてその欠点を救うことがあります。テレスを建物の近くに設ける場合は、建物と同様な材料を用いるのがよく、また、庭の中に入れる、庭を楽しむ季節が短いこの地方の人によく、形も軟かに造った方がうつります。

この孤立したテレスを私はよく設計の中に喜ばれるようにして居ります。

此の出の深いのは日本建築の特色ですが、北海道の場合は、材料の関係で軒の出が浅く、また、屋根の雪を考えて建物の附近には全然植栽ができません。その点で造園家として、建物と庭との連絡が非常にむずかしい。何とかして、独自な方法で連絡をつけたいと考えています。私は渡道してからの年が浅く、まだその点で人に語るほど郷土的研究をしておりませんので、今は、家と庭との連絡が大切である。というだけで止めて置きます。

以上はこれから新しく庭を造られる方が、計画を樹てる前にこれくらいのことは知つていてほしいと思い、書いてみたのですが、どうやら私は、技術的なことを文字で伝えることのむずかしさを知つただけのようです。

北海道の造園に新しいルネサンスよ、興れ。私は、一人で庭を造りながらよくそう思います。

洋風建築の場合には、庭との連絡によくテレスが用いられます。北海道の場合は、庭に糸を張りそれにならつて配列し、内側は不揃いでよい。桂石には肩のきいている(丸くなつてない)石を選んで使います。

北海道に造園教育よ、興れ。

しかし、今の私にはさう呼びかける力がない。ただ、自分の作品を通して、それを示すだけです。